
令嬢の護衛

＋幻想＋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

令嬢の護衛

【Nコード】

N9558G

【作者名】

十幻想+

【あらすじ】

ある日、母に連れられて一人の少年がコンサートホールに来ていた。そのコンサートホールではクラシックが演奏され、会場に来ていた人達もうつとりと、その雰囲気酔いしれていた。だが、絶望はすぐそこに座っていた。静かにオーケストラに含まれる演目ヴァイオリンのソロを聴いていた時、繊細で美しいヴァイオリンの旋律を掻き消す爆発音が起こった。テロだった。誰を狙ったのかは分からない。このコンサートホールには世界に名だたる資産家たちが招待されていたのだ。中には悪名を轟かせている人物だって何人もい

る。この絶望^{テロ}が一人の少年の家族を奪い、復讐^{テロ}という名の紅い悪魔を産み落とした。

第零章（前書き）

この物語に登場する人名、団体名はフィクションであり、現実とは関係ありません。

中にはグロテスクな表現も含まれますので、それを承知の上で閲覧される事をご了承ください。

そんな時だった。少年が意識を手離して楽になるのかなと思った時、少し離れた場所から女性の声と男の声が耳に届いた。女性の声に少年は聞き覚えがあった。聞き間違えるはずもない。これは大好きな優しく暖かい母の声。だが、男の声に少年は聞き覚えがなかった。

「お願い、私はどうなってもいいから！私はあなたの言う通りにするから子供だけは……息子だけは助けて！」

「ほう、息子がいるのか。しかも、ここにいと……そうかそうか、いいだろう。せめてもの慈悲だ」

男の言葉を聞いて少年の母は安堵する。自分は助からないが息子だけは助かる。それなら良かったと、心から安堵した。男の二の句を聞くまでの短い間だけだったが。

「ああ、やはり家族は共に在るべきだからな。息子もすぐに送ってやるから地獄で待っている」

直後、パンツという乾いた音が鳴り、何かが倒れる音が聞こえてきた。そして地獄に響く悪魔の笑い声。

少年は理解していた。母は悪魔の凶弾に倒れたのだと。自分もすぐに逝く事になると。

(それも……いいかもしれない。こんな地獄よりお母さんのいる天国の方が幸せ……っ)

そう思ったのも事実だ。だが少年は直視してしまった。床に倒れ伏し、未練を残したまま逝った数多の死体を。

今までは呆つとした、混乱した頭で見ていたので明確な『恐怖』を

感じなかった。だが、悪魔が自分を殺しにくると分かった時、少年は恐怖に押し潰されそうになった。

「お前が紅家の息子か……なるほど、確かにヤツの面影がある」

少年は震える身体で視線を男に向けようとする。だが、首を動かすのも辛い現状で何が出来てもなかつた。

それこそ、今の少年には男の顔を見る事すら、許されてないのだ。単純に悔しかった。善良な一般市民だけだったかは分からないが、確実に何人かは善良な市民だったはずだ。それを男は殺した。そして母を殺した。恐らくは父も殺されているのだろう。

「……………」

何を言ったのか、何を答えたのかも少年は覚えていない。何も言えなかつたのかも知れない。何か男を罵倒したのかも知れない。だが、男は満足そうに、新しい玩具を見つけ、親に買ってもらった少年のような笑い声を上げる。

「いいぞ。俺が憎いのだな。ならば俺を殺す為に力を手に入れる。増悪に染まった絶対的な力をな！」

直後、中東あたりの言葉だろうか、男の傍まで駆け寄ってきたもう一人の男と会話している。そして会話が終わると駆け寄ってきた男が走り去っていく。

「ふむ、お前は運もいらしいな。軍が派遣されてきたらしい。今は軍と事を構える気はないので……俺はお前の両親を殺した。憎いなら、復讐を果たしたいのなら生き残ってみせろ。そして俺を追って来い。俺は――」

そこで少年の意識は途切れた。次に目を覚ました時にいたのは白い部屋。すぐにここが病院だと気付いた。だが、そんな事はどうでもいい。頭が、身体が、細胞の一つ一つが、あれが現実だと教えていた。つまり、両親は殺されたのだ。あの悪魔に。

「悪魔を殺せるのは悪魔……なら、俺はあいつと同じ悪魔になってやるっ！」

「天使様や神様は復讐する人に手を貸したりしないのよ。どんな事も許せる、優しい人になりなさい」母の言葉が蘇る。だが、少年の決意は変わらない。

「二人の仇を討てるなら俺は悪魔でいい。復讐する紅い悪魔になってやる」

真っ白な病室で少年の紅い瞳だけが、全てを憎むように揺らめいていた。

それから十年後　あの時の少年は二十歳になっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9558g/>

令嬢の護衛

2010年10月12日05時20分発行